戦後のドイツにおける脱ナチ化の様相（2）ミュンヒェンの場合

安　松　みゆき

【概　　要】

小論では、戦後のドイツにおける脱ナチ化の活動について、ミュンヒェンの主要建築に的を絞り、実見したデータを元にして、「破壊」「転用」「変更なし」「廃墟」の四つに分類し、その特徴を抽出した。その結果をまとめ、さらに別稿で考察したベルリンの事例と比較し、ミュンヒェンではベルリン同様に脱ナチ化において、ナチの紋章の除去によって建物を破壊せずに脱ナチ化の条件を整えた点で共通性を示しつつも、ミュンヒェンでは比較的に政治中枢の建物が残されており、それらを芸術的な転用によって脱ナチ化を計っていたことが確認できた。さらに戦前にナチ推奨の現代美術の展覧会場としてつくられた「ドイツ芸術の家」では、名称を「芸術の家」に変えたものの、戦後もあえてそのまま展覧会場とし、戦前に退廃美術として排斥された作品を展示することで、本来の意味での近代美術の復権と施設の脱ナチ化を計ったことが認められた。負の遺産について設けられた市内各所の説明板については、近年部分的に取り外されており、脱ナチ化の後退と捉えられる面が見られたため、今後も脱ナチ化の活動を注視する必要がある。

【キーワード】

ミュンヒェンのナチ建築、脱ナチ化、ナチ建築の保存、イコノクラスム、ナチ記録センター・ミュンヒェン

はじめに

ドイツ第三帝国時の美術が戦後においてナチ時代に与えられた文化的･政治的な刻印を否定し、あるいは消去してきたのかを明らかにするために、特に建築に注目して戦前の意味の排除をめぐる経緯を前回に引き続き検討する。小論では、第三帝国時の第二の都市で、ナチ党発足の都市であり、文化都市ミュンヒェンの建築を考察対象とする。その際に前稿で取り上げたベルリンの事例との比較を行い[1]、戦後のドイツがいかに第三帝国の遺構からその当時の意味を消し去ろうとしたのか、その一端を明らかにすることを試みたいと思う。

戦後ミュンヒェンにおけるナチ建築の残存状況の研究を見ると、当初は現存する規模の大きな建物だけが知られていた。しかし 1993 年にミュンヒェン工科大学建築博物館のヴィンフリート･ネルディンガー（Winfried Nerdinger）によって、バイエルン州におけるナチ時代の大小さまざ

まな建築を調査対象として現状調査が行われ、その結果がまとめられた[2]。その後、1995年にミュンヒェン中央美術史研究所によって、ミュンヒェンのナチ党中心部に注目して研究が深められた[3]。さらにその研究を受けて、たとえばペーター・ケプフ（Peter Köpf）が国王広場のナチ党中心部の建築を調査したように、多くの関連する研究が行われるようになり[4]、2015年にはミュンヒェンのナチ建築に関する解説付き目録が上梓された[5]。

このようにミュンヒェンのナチ時代の建築については、1990年代から基本データの調査がすすめられて保存状況の概略が明らかにされた。しかしながら、具体的な脱ナチ化の方法や意義、あるいは効果についてはまだ十分に議論が深められてはいない。また他都市との比較もすすめられていない。これらの点を進展させることが本稿の目的である。

１ミュンヒェンのナチ時代の建物の調査方法

ナチ時代に造られた、あるいは利用されていた建物の戦後の状況を把握するために、『ミュンヒェン 1933 － 1945 *München 1933-1945*』などを参考資料にして[6]、実際に現地を踏査し、現状の写真撮影をおこなった。参考資料によれば、ナチ時代の関連残存建造物は127件を数え、小論では、そのうち公共建築であるか、あるいは住宅であっても歴史的に大きな意味を持つものに限定して、17件を考察対象とし、ベルリンの事例の考察でおこなった方法を援用して分類を試みた。具体的には、「破壊」、「転用」、「廃墟」、そしてベルリンには認められなかった「変更なし」を加えた４パターンの分類である。これらの分類の指標については、個々の分析において触れるが、その分類の結果、「破壊」の事例は７件、「転用」の事例は５件、「変更なし」の事例は４件、そして「廃墟」の事例では１件を数えた。

２　ミュンヒェンのナチ時代の建物の現状分類

2.1.　分類１「破壊」の事例

「破壊」とは、終戦直後に意図的に破壊され、それによって第三帝国時代に刻印された意味を根底から消去された事例を指す。この場合、負の記憶の手がかりすら消失するので、単なる忘却に陥る危険性が生じてくる。それゆえに、元々あった場所がその後どのように活用されているのか、また記憶をどのように伝達するのかも、当該施設の脱ナチ化の成否に関わってくる。

2.1.1. 栄誉神殿［図１、２］

栄誉神殿は1935年にパウル・ルードヴィヒ・トロースト（Paul Ludwig Troost:1878-1934）によって、国王広場に面して建てられた記念碑である。1923年に政府に対して武装蜂起し、ヒトラーも拘束されたミュンヒェン一揆の際に、警察に銃殺された16名の党員を、ナチ党が「殉教者」として讃える意図で造られた[7]。国王広場に左右対称に置かれた記念碑には、それぞれ鉄製の８つの棺が置かれ、屋根は掛けられず、神殿の外観を見せている。それら棺を見守る二人の親衛隊の哨兵が永遠の警備を実施したという[8]。

図１《栄誉神殿》2016年現在
（総統官邸側）

1945年６月にアメリカ軍政府は、このナチのモニュメントの破壊を決断し、1947年１月９日と16日の二日間にかけて爆破した。ただし基壇の部分までは倒壊せず、それ以上手をつけると隣接するナチ党の建物（後述のように保存・転用された）に影響が出るために、そのままで留め

られたと説明されている[9]。たしかに基壇は残存している。

さて、この記念碑は、元の国王広場をナチ党の英雄の広場とする上で要となる位置に置かれていたため、破壊は広場の存在意識を変える上で大きな意味があったといえる。栄誉神殿と一体に景観を形づくっていたナチ党の重要な建造物はそのまま残されたので、記念碑の除去は必要不可欠な措置といえよう。しかも基壇は残されたものの、年月とともに雑草に覆われ、一部は雑木林の体をなしている。そのためそこにナチ時代の景観が蘇る余地はない。近年になり、近くに歴史的経緯を記載する説明板が置かれ、残存するナチ時代の基壇が負の遺産であることを理解できるようになった。しかし2015年にすぐ横にナチの資料館「ナチ記録センター・ミュンヒェン」の建物が造られたことで[10]、その説明板は取り除かれてしまっている。

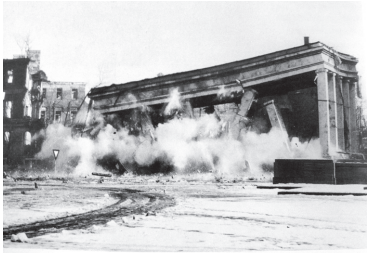

図２《栄誉神殿》 爆破の瞬間
1947年1月16日

2.1.2. ゲシュタポの建物［図３、４、５］

ナチの秘密警察、すなわちゲシュタポの司令部の建物も消失したが、その経緯は栄誉神殿とは異なる。1848年にフリードリヒ・フォン・ゲルトナー（Friedrich von Gärtner : 1791-1847）によって造られたヴィッテルスバハ家の宮殿にゲシュタポが移転してきたのは、1933年秋とされる[11]。もっぱら体制を批判する人々を逮捕して拷問に処する場として利用され、ナチの政治弾圧と恐怖を象徴する施設だった[12]。この建物は、すでに戦時中の1944年に連合軍の爆撃によって破壊されたので[13]、戦後に解体するまでもなくすでに存在しなかった。入口に置かれていた石造のライオン像は、19世紀の彫刻家ヨハン・ハルビヒ（Johann Halbig:1814-1882）によるものだが[14]、それだけが宮殿からゲシュタポの時代を経た象徴として現存している。

図３ 《ゲシュタポ》1940年

敷地はバイエルン州立銀行に譲渡され、現在はそこに銀行の建物が建てられている[15]。戦後は機能が全く異なる銀行の本店として建て替えられたため、建物からこの場所の負の歴史を想起することは難しい。そのためナチ時代にゲシュタポだったことは、銀行の建物に取り付けられた説明板と、銀行内部に置かれた装置により、ゲシュタポの恐怖の歴史を伝える当時の映像を流すことで、ナチ時代の忌まわしい過去を振り返る方法がとられている。

図４ 現在のゲシュタポの跡地
《バイエルン州立銀行》2016年現在

図５ 《当時のゲシュタポだったことを伝える説明板》2016年現在

2.1.3. ナチ党本部「茶色の館（Braunes Haus）」［図６］

ミュンヒェンは1920年にナチ党が決起した場所であり、ナチ政権下には首都ベルリンにつぐ重要な都市と位置づけられた。そのためにベルリンの他にこのミュンヒェンにも後述する総統官邸が置かれていた。

ナチ党本部は、総統官邸のすぐ横にあった会社経営者ヴィリー・バルロー（Willy Barlow：1869-1928）の所有していた「バルロー宮殿」を、彼の死後に購入して1930年から使われた[16]。当時ナチの制服の色と

された茶色をもじって「茶色の館」と呼ばれていた建物は、ヒトラーも設計に加わって改築されたという[17]。しかし、爆撃によって完全に倒壊し長らく空き地になっていたが、2015年にようやくそこに約40億円を連邦政府、バイエルン州、ミュンヒェン市役所が投じてナチの資料館「ナチ記録センター・ミュンヒェン、国家社会主義の歴史に関する教育・記憶の場所として」が設立された[18]［図７］。それによって学術的かつ教育的に脱ナチ化の拠点をつくるとともに、まさにそのことによって敷地自体の脱ナチ化を実現している。

図６　《ナチ党本部（茶色の館）》1930年

2.1.4. その他のナチ関連の建物

ナチ関連の建物は、総統官邸近くに造られていた。たとえば、上級党司法部の建物は1944年にその役目を終えており[19]、そのまま建物は残されているが、それ以外はほとんど爆撃で壊された。当時の大蔵省と監査局は1944年に爆撃で壊され、1955年にアメリカハウスに建て替えられた[20]。

このように戦後に破壊された建物はかなり限定されているが、破壊の経緯にかかわらず、その場所に関するナチの負の歴史を伝える説明板の設置や、「ナチ記録センター・ミュンヒェン」が設立されていることがわかる。ただし、センター設立によって近隣の説明板が取り外されてしまい、一部後退したと捉えられる面が新たに生じている。

図７　「《ナチ記録センター・ミュンヒェン》2016年現在

2.2.　分類２　「転用」の事例

「転用」とは、ナチ時代の建物を一部だけ残してイメージを変える方法がとられている場合と、建物にはほとんど手をつけずに使用目的が変更されている場合を意味する。ミュンヒェンの遺構では、特に総統官邸などの、ナチの代名詞となるような建物がこの分類に含まれる。

2.2.1　ミュンヒェン・リーム空港［図８］

ミュンヒェン・リーム空港は、参考資料によると、当時ヨーロッパで最も巨大な空港となったベルリンのテンペルホフを設計したエルンスト・ザーゲビール（Ernst Sagebiel:1892-1970）によって1939年に造られた[21]。航空大臣ヘルマン・ゲーリングが、ベルリンをはじめ、シュトゥットガルト、ウィーン、そしてミュンヒェンに新しい大空港を建設する命令を1936年に出した。それらすべての建設をベルリンのザーゲビール事務所に依頼したという[22]。

図８　《ミュンヒェン・リーム空港》2016年現在

ミュンヒェンの空港は第二次世界大戦中に繰り返し爆撃を受けて、その七割まで破壊された[23]。1948年に再建されるものの、1992年から近郊のエルドリンクに新しい空港が造られたため、1998年から空港跡地はミュンヒェンの見本市会場に転用され、元の建物からは、タワー部分と搭乗手続きのホールを新しいオフィスビルに組み込んで保存したものの、他はすべて壊された[24]。

手続きホールの建物の中庭側に廻ると、空港の建物であったことを示すロゴ「Flughafen München（ミュンヒェン空港）」が当時の時計とともにそのまま残されており、記憶を呼び覚ます手がかりを与えている。ただし飛行場の一部の建物だけを残し、さらに周囲もオフィスビルが林立しているので、ナチ時代の痕跡は現代的な景観によって、すぐには認識し得ないほど打ち消

されている。

2.2.2. 総統官邸［図９］

ナチにとって最初の蜂起の場となったミュンヒェンに、ヒトラーは首都のベルリンに続いて総統官邸を置いた。1938年にトローストによって建設され、ナチ好みの古典的なデザインによるもので[25]、意匠と政治的機能の両面でナチ建築を代表する建物といえる。さらにこの建物は、立地の上でも大きな意味を持っている。バイエルン国王の広場を囲むかたちで、総統官邸は、総統官邸と同形のナチ政府関係の建物とともに左右対称に配置されている。

図 9　《総統官邸》2016 年現在

この建物は、前述の空港とは異なって一切破壊されずに別の用途に転用されており、建築作品として見ても、ナチ時代の造形的特徴を変えることなく、そのままのかたちで残されている。この建物には戦後 1948 年からドイツに民主主義社会を確立させる拠点として「アメリカハウス」が置かれ、一時期には入口のハーケンクロイツを掴むナチの鷲から、アメリカの鷲の描かれた板に取り替えられた[26]。ベルリンのテンペルホフ空港では彫刻の鷲を塗り替える方法をとって失敗したが[27]、ここでは鷲の描かれた板を掲げることで完全に取り替えを可能にした。その後ミュンヒェンの音楽大学の建物として使用されることになり、アメリカの鷲も外された。内部の主階段室や暖炉などが当時のまま残されているが、それ以外の家具などはなくなっているという[28]。

このように総統官邸では、一見すると脱ナチ化がなされていない印象を受けるが、ナチの象徴としてのハーケンクロイツと鷲を取り除いていること、そして建物の用途を政治から文化へと大きく転換することで、ナチ時代の政治的な意味を消去している。さらに従来より注目されていることだが、国王広場の総統官邸側（東側）に植えられた木立の存在も、景観を脱ナチ化する作用をもたらしている。年月を経て木立は大きくなり、今日では広場からナチ建築は見えにくくなっている。またナチ時代には広場一面を覆っていた石畳を壊して道路を通し、さらに左右に非対称なかたちで芝生を植えて、一体化されていた広場と総統官邸を完全に分離した[29]。ナチ党の殉教者の広場というナチ時代に付け加えられる意味は、これらの操作によって消去されたといえよう。

2.2.3.　ナチ行政館［図 10］

ナチ行政館は、前述したように国王広場に対して総統官邸と左右対称に置かれた建物で、総統官邸と同様にトローストによって国王広場の東側ですすめられた景観構成の一部を形づくる。その敷地には、もともとはユダヤ人が所有する建物プリングスハイム宮殿（Palais Pringsheim）があり、ナチはそれを強制的に収奪した[30]。道路を挟んで建つ総統官邸と地下トンネルでつながっている[31]。

図 10　《ナチス行政館》2016 年現在

戦後この建物もそのまま残され、総統官邸とともに 1951 年までナチの略奪美術品返還のための美術品集積の拠点「セントラル・コレクティング・ポイント（Central Collecting Point）」が置かれた[32]。その後この建物は造形芸術関連の研究拠点として活用され、中央美術史研究所、考古学研究所、そしてグラフィックコレクション室として利用されている[33]。外観だけでなく、内部も主階段などは当時のままのデザインが認められ、ナチの象徴だけが除去されている。

この建物においても総統官邸同様に当時の姿のままで保存されている。この建物の場合も、脱

ナチ化の方針は総統官邸と同様であり、政治から文化への用途の転換が大きな意味を持った。とくにこの建物がナチの美術品の略奪という負の遺産の解消に用いられたことが、美術関連の施設への転換を意義深いものにしている。

ところで総統官邸と合わせて、近年この建物がナチの建物であったことを詳述する説明板が建物近辺に立てられていたが、栄誉神殿の例と同じく、撤去されてしまった。近接して2015年に「ナチ記録センター・ミュンヒェン」が設立され、歴史的経緯の説明が充実されたことは間違いないが、それぞれの場所の意味がわかりにくくなった面もある。

2.2.4.　ヒトラー自邸　プリンツレゲンテン広場［図11］

1914年にフランツ・ポップ（Franz Popp:1891-1981）によって建てられた建物に、1929年にヒトラーが引っ越してきた[34]。内部の改装はトローストが担当している。外観は、古典的なデザインを見せる歴史主義的な集合住宅である。この建物は当時ヒトラーの自邸として誕生日などには飾り立てられた[35]。また、地下にはかなり広い防空壕が造られていることでも知られている[36]。

図11　《ヒトラー自邸（Prinzregentenplatz）》2016年現在

この建物も当時のままの姿で現存しており、脱ナチ化のために取られた方法は、利用の変更である。現在警察の建物となっており、中に入ることは厳しく制限されている。そこにはヒトラーの私的な空間への強い拒絶的な態度が認められる。またここがヒトラーの自邸だったことを示す掲示板などはどこにも認められない。なおヒトラーは1913年からわずか一年だけミュンヒェンに出てきたときには、シュライスハイマー通り34番地に住んだが、その建物も残っている［図12］[37]。現在は1階が子供用品店に転用されているが、この建物においてもヒトラーが住んだことを示す説明板などは認められない。栄誉神殿や総統官邸のような公的施設とは異なり、ヒトラーの私的住居の場合には、むしろ広く周知することを避ける方針が取られている。周辺の日常性を守り、聖地化を避ける配慮であろう。

図12　《ヒトラー自邸（Schreissheimerstr.）》2016年現在

このように、公的施設から私邸まで幅広いナチ関連の施設が転用されているが、その性格や経緯によって異なる方針が使い分けられている。

2.3. 分類３「変更なし」事例

「変更なし」事例とは、ナチ時代と同様に建物そのものも変更なく、またその機能も当時と同じ場合を指す。

2.3.1.　ドイツ芸術の家［図13］

ドイツ芸術の家は、1933年から4年をかけて建てられた、ミュンヒェンにおける現代美術の展覧会場である[38]。この建物が造られる以前には、グラスパラスト（ガラス宮殿）と呼ばれる建物が現代美術の展示会場として存在した。しかし1933年に火災によって焼失してしまったため、元々美術に熱心に介入したヒトラーは、ナチ公認の美術を喧伝するために、新しい展覧会場の建設をいち早くすすめたのである[39]。ここでも設計はトローストであり、ナチ好みの新古典主義が

図13　《ドイツ芸術の家》2016年現在

外観のデザインを支配している。

第二次世界大戦中は迷彩網を建物に被せるなどして爆撃を免れ、結果としてナチの芸術制作の刻印を受けた美術館が戦後に残されることになった[40]。終戦直後にアメリカハウスの一部として用いられた時期もあったが、注目すべきはその後の用途である。ナチ時代と同じデザインのまま、美術館という同じ用途で使われ続けたのである。変更されたのは、名称が「ドイツ芸術の家」から、「芸術の家」へと変えられことと、中央入り口上に飾られていた鷲の紋章が、戦後にはずされただけだった[41]。

一見すると、この建物では脱ナチ化が行なわれていないように見受けられる。しかしこの建物で実施された展覧会の内容を詳細に見れば、むしろそのまま美術館として使うことで、脱ナチ化の意思を示す場となったことに気づく。ナチ時代にこの建物ではナチのイデオロギーを表象するドイツ人の美術のみが展示される一方、当時の現代アートの多くはユダヤ的と非難され、退廃美術としてみせしめのために劣悪な環境で展示されたり、破壊や美術館からの破棄・売却の対象とされた[42]。忌まわしい美術弾圧の歴史がこの建物には刻まれていた史実の存在である。

そのようなナチ時代の芸術観を壊すために、戦後にあえてこの建物を美術館としてそのまま存続させて、ナチの否定した美術の展覧会を一早く実施していったのである[43]。かつてのナチ美術の殿堂に展示されることにより、当時「退廃」とされた美術の本当の意味での復権をおこない、同時にその場所も脱ナチ化されるという考え方である。

この建物はナチ時代からの姿と機能を変えることをせずに、脱ナチ化をすすめている稀有な事例といえる。

2.3.2. エヴァ・ブラウン自邸［図 14］

ヒトラーの自宅からほど近いところにヒトラーの愛人だったとされるエヴァ・ブラウンの自邸が残されている。ヒトラーが彼女のために 1936 年に庭付きの一戸建て住宅を当時の３万帝国マルクで購入したとされる[44]。建物の外観は、ビーダーマイヤー様式の清楚でエレガントなデザインを見せている。彼女は、ヒトラーのお雇い写真家ハインリヒ・ホフマンのところで働いていたことで、ヒトラーと出会うことになったという[45]。彼女はヒトラーとともにベルリンの防空壕で自害しているが、彼女の自宅にあった AH と刺繍がされていたシーツなどは、アメリカ軍によって土産として没収され、彼女の自宅には何も残されていなかったとされる[46]。

図 14 《エヴァ・ブラウン自邸》
2016 年現在

現在もそのまま建物は残されており、個人宅になっているようである。しかしヒトラー本人の住居と同様に、かつての所有者を表記するものもなく、日常の生活空間に戻されている。

2.3.3. ホフブロイハウス［図 15］

観光対象として世界的に知られるこのビアホールの現在の建物は、マックス・リットマン（Max Littmann: 1862-1931）によって 1897 年に建てられており、ネオルネサンス様式の建物である。1589 年にヴィルヘルム五世によってビール製造を許されて以降、王室御用達のビール醸造所として名声を博した[47]。現行の建物で、1920 年にドイツ労働党を改名して NSDAP（ナチ党）が設立され、２千人の前でヒトラーが演説した。それゆえナチ時代には重要な巡礼の場となったが、

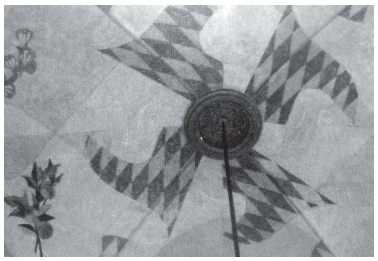

図 15 《ホフブロイハウス天井》
2015 年頃

戦後もそのままのかたちでビアホールが再開されている[48]。じつは内部の天井には、バイエルン王国旗をナチの卍型にデザインした天井装飾など、ナチ時代の象徴が見られ、それも当時のままになっているという[49]。脱ナチ化への措置は、ここではほとんど認められない。むしろ、以前からここでヒトラーが演説したことが世界的に知られており、ヒトラーの山荘ケールシュタインハウスのようにナチ観光の一例になっている。

2.3.4. 上級財務局［図 16］

フランツ・シュタドラー（Franz Stadler : 生没年不詳）によって 1942 年に造られた。戦後すぐに「アメリカハウス」として使用され、1949 年まで州立議会がここで開催された[50]。現在は財務省の一部として使われているので、政治体制は異なるとしても、行政上の役割に大きな変更は生じていない。建築デザインとしても本質的な変更は加えられず、ただナチ時代に施された鷲にハーケンクロイツの紋章から、ハーケンクロイツだけが除去された。行政機関による説明冊子においても、ハーケンクロイツの除去だけを説明している[51]。鷲もまたナチの紋章の要素であるが、ローデンフェルドの研究が紹介するエピソードでは、戦後のバイエルン州財務長官は、ハーケンクロイツの除去が、その他のナチのデザインや痕跡を残すための、いわば免罪符として機能する事情をよく表していると述べている[52]。

図 16　《バイエルン州立財務省》
2016 年現在

2.4.　分類４「廃墟」となった事例

「破壊」の事例の第一に挙げた栄誉神殿は破壊が不完全だったため、土台はそのまま残された。その部分は長らく廃墟のような状態で、現在も存続している。土台のそばには説明板が置かれ、それによって公的な脱ナチ化がなされたといってよいだろう。なおそれ以外に廃墟として残された事例はミュンヒェンではほとんど認められない。

以上のようにミュンヒェンにおいて「破壊」、「転用」、「変更なし」、「廃墟」の４つの区分に分類し、それぞれに該当する事例が認められた。ミュンヒェンではナチ時代の建物に対して、比較的近年になって説明板が立てられて知られるようになった。何も表記せずに忘却によって脱ナチ化を計っていたと理解することもできるが、やはり公にすることで脱ナチ化が強くすすめられることはまちがいない。その点でミュンヒェンでは、近年になって関連建造物の多くが脱ナチ化への意図を明示しつつ検証されているといえる。

ただし最近に憂慮すべき行動が認められる。総統官邸近くの広場に過去の歴史を説明する説明板を立てて、ナチ時代の負の遺産の残存を公にすることがすすめられていたが[53]、隣接する場所に「ナチ記録センター・ミュンヒェン」が設立されたことで、それらの説明板が取り外されてしまったことである。それに代って説明用のポールが立てられているが、そのポールの説明には負の遺産を避けて観光名所のみが明示されているのである［図 17］。

図 17　《栄誉神殿前の説明用ポール》
2016 年現在

「ナチ記録センター・ミュンヒェン」の設立は、学術的かつ教育的に脱ナチ化への最も重要な前進といえるが、しかしそれにともなって、センターにすべて負の役割を担わせることで、それら周囲にはナチ時代の建物が残されていながら、その場所をナチ時代ではなく、19 世紀に国王広場が造られた当時の本来のバイエルン王国の歴史を示す「ノ

スタルジックな場」として読み取らせようとする姿勢が浮かび上がる。

3　ベルリンの事例との比較

3.1. 共通性

ベルリンでのナチ時代の建物の戦後の状況について別稿で考察した[54]。振り返ってみれば、ベルリンでは現存する建物の場合にその機能を変更する例が見られたが、ミュンヒェンでも用途の転換が脱ナチ化の文脈で大きな意味を持つ例が認められた。また、ナチの象徴であったハーケンクロイツや鷲のマークを取り外すことで、脱ナチ化をすすめていた。ミュンヒェンでも同様に現存するナチ関連の建物の大半において、ハーケンクロイツが取り除かれている。どちらの都市でもハーケンクロイツのみをナチの象徴と見なす動きも認められ、そのため鷲のマークを残す例が見られた。そして負の遺産であることを伝えるために建物の前に説明板を置いてナチ時代の役割などを明示する方針は、両都市に共通している。

またベルリンでは、「虐殺されたヨーロッパのユダヤ人のための記念碑」がかつての総統官邸の近くに2005年に設置されたように、ナチの問題を象徴したり、あるいは展示、研究するための施設が次々と設けられた。建築空間自体がホロコーストや亡命を象徴するベルリン・ユダヤ人博物館（2001年）や、ゲーリングの空軍省のそばに設置され、図書館を付設するテロのトポグラフィー（2010年）などである。ミュンヒェンは明らかにこれらの動きに遅れをとったが、ようやく2015年にナチ党本部跡地に「ナチ記録センター・ミュンヒェン」が設立され、脱ナチ化が学術的かつ教育的に実現されはじめたといえる。

3.2.　相違性

そもそもベルリンとミュンヒェンでは戦争被害の状況に相違があり、激しい空爆と市街戦の舞台となったベルリンでは重要な政府機関の建物やヒトラーの総統官邸などが戦後に破壊するまでもなくすでに失われていた。これに対して、ミュンヒェンでは戦火を逃れた施設が多く、特に総統官邸周辺に多くの関連施設が残存していた。ナチの主要施設が戦後に残された場合、その政治的な機能や象徴性をどのように解除するのかが問題になる。ベルリンでもそのような例は若干存在し、機能の変更、象徴の除去、デザインの変更が行なわれていたが、ミュンヒェンでは芸術に関わる文化施設への転用が、脱ナチ化の成功例をもたらした。総統官邸を音楽大学に、ナチ行政館が美術の研究・保管施設になり、それぞれ文化施設として存在感を発揮している。そのことからドイツでは、芸術に平和的な側面を担わせていることが改めてわかってくる。

ナチ時代に文化都市とされ、その結果「退廃美術展」と「ドイツ芸術の家」における「大ドイツ美術展」とによる歪んだ芸術制作の主要な舞台となった。そのミュンヒェンを、ナチがつくった施設に新たな芸術上の役割を担わせることによって正常な文化都市に戻したといえるのかもしれない。とくにナチ美術の殿堂「ドイツ芸術の家」をあえて美術館として存続させて、そこに「退廃美術展」に出された作品を展示し、退廃とされた美術の復権と、施設の脱ナチ化とを実現した事例は、ベルリンには見られないミュンヒェン独自の手法であり、高く評価しうる。

ところがすでに見たように、ミュンヒェンでは一部の説明板の撤去という後退現象が認められた。脱ナチ化とは、ナチの痕跡や記憶を消し去って何もなかったことにすることではない。負の歴史を消去できない以上、過去を公に説明することから出発しなければならない。それゆえ、ナチ関連の建物において脱ナチ化をすすめるためには、過去の所以を説明する表示が不可欠だろう。ミュンヒェンではそれが後退している面が認められるのである。それが一時的なものなのか否か、今後のミュンヒェンでの対応に注視しなければならないだろう。

おわりに

本論では、戦後の脱ナチ化について特に建築遺構に注目して考察した。その際に、完全に「破壊」された例、「転用」された例、そのまま「変更なし」の例、「廃墟」になっている例と４つに分類して検討した。

ミュンヒェンでは、ナチ時代の負の歴史を取り上げる新施設の設置で、ベルリンに遅れをとったため、脱ナチ化に消極的と見られることもあったが、本論において確認したように、残されたナチの主要施設において、脱ナチ化の措置が取られていた。その手法においては、象徴的要素の除去、用途の転用、説明板の設置など、ベルリンでも見られた措置が基本となっているが、芸術・文化による脱ナチ化の展開にミュンヒェンの独自性が見出された。すなわち政治施設（総統官邸とナチ行政館）の文化施設（音楽と美術）への転換と、ナチ美術の施設だった「ドイツ芸術の家」（現「芸術の家」）をあえて美術館として存続させる措置とである。特に後者は、ナチによって否定された美術の復権と、施設の脱ナチ化とを、新たな展示内容によって同時に成し遂げた点で高く評価しうる。なお近年のミュンヒェンにおける説明板の撤去に対しては、懸念を禁じ得ないことを付言しておきたい。

本稿は、科研（基盤研究（B）、代表：丹尾安典早稲田大学教授、期間：2015-2019 年、課題番号：15H03179「日本近代における＜イコノクラスム＞―破壊をめぐる視覚表象研究」）によって実施した調査の成果の一部をまとめたものである。

欧文要旨
Die Entnazifizierung der NS-Gebäude in Deutschland
（２）Die Beispiele in München

In diesem Artikel untersuchte ich die Entnazifizierung der NS-Gebäude in München nach dem Zweiten Weltkrieg und verglich sie mit den Berliner Beispielen. Die Behandlungen der NS-Gebäude kann man allgemein in die vier Typen einordnen, d.h.: Zerstörung, Zweckveränderung, unveränderte Weiterbenutzung und Vernachlässigung (Ruine). Die Münchner Beispiele zeigen einerseits die ähnlichen Methoden wie Berliner, beispielsweise die Entfernung der NS-Symbole wie Hakenkreuz und die Errichtung der Informationstafel über die Geschichte. Andererseits haben die Münchner Beispiele vor allem durch Kunst und Kultur die bemerkenswerten Ergebnisse gebracht. Das Führerbau und Verwaltungsbau der NSDAP wurden zur kulturellen Einrichtungen der Musik und der bildenden Kunst verändert und damit entnazifiziert. Das eindrucksvollste Beispiel ist Weiterbenutzung des "Hauses der deutschen Kunst" als Ausstellungsräume, wo in der Nazizeit die Großen Deutschen Kunstausstellungen veranstaltet wurden. In der Nachkriegszeit wurden absichtlich die in der Vorkriesgzeit als "entartet" untergedruckten Kunstwerke von den Expressionisten u.a.ausgestellt. Dadurch wurden die Kunstwerke rehabilitiert und der Ort an sich entnazifiziert. Am Ende des Artikels habe ich hingewiesen, daß vor kurzem bedauerlicherweise ein Teil der Informationstafel am Königsplatz in München weggenommen worden ist.

1

1　拙論「研究ノート　戦後のドイツにおける脱ナチ化の様相（1）ベルリンの場合」『別府大学大学院紀要』第19号、別府大学紀要委員会、2017年、107-116頁。（以下、安松『別府大学大学院紀要』2017と略記）

2　Hrsg.v.Winfried Nerdinger : *Bauen im Nationalsozialismus, Bayern 1933-1945,* München 1993（以下、Winfried Nerdinger 1993と略記）. 1991年にナチ時代の芸術が、彫刻、絵画、建築毎にシリーズで刊行された。そこでは当時の主要作品の基本データがまとめて整理されている。Mortiner G.Davidson : *Kunst in Deutschland 1933-1945, Band 3. Architektur,* Tübingen 1992.

3　Hrsg.v.Iris Lauterbach : *Bürokratie und Kult, Das Parteizentrum der NSDAP am Königsplatz in München, Geschichte und Rezeption,* München 1995.

4　Peter Köpf : *Der Königsplatze in München : ein deutscher Ort,* Berlin 2005.
他にたとえば以下の研究がある。Helmut Weihsmann : *Bauen unterm Hakenkreuz, Architektur des Untergangs*, Wien 1998. Hrsg. v. Haus der Kunst München : *Haus der Kunst, Geschichten im Konflikt,* München 2012.

5　Maik Kopleck : *München 1933-1945,* Berlin 2015.（以下、Maik Kopleck 2015と略記）

6　Maik Kopleck 2015. 以下も参照のこと。Ulrike Grammbitter und Iris Lauterbach : *Das Parteizentrum der NSDAP in München,* Berlin 2015. Landeshauptstadt München : *Themen GeschichtsPad, Der Nationalsozialismus in München,* München 2006.（ミュンヒェン市立博物館配布資料。以下、Landeshauptstadt München 2006と略記）

7　Maik Kopleck 2015, S.10.（＝註5）Ulrike Grammbitter : Das Parteizentrum der NSDAP, in : Ulrike Grammbitter und Iris Lauterbach : *Das Parteizentrum der NSDAP in München,* Berlin 2015, S.22-24.（以下、Ulrike Grammbitter 2015と略記）Iris Lauterbach : *Der Central Collecting Point in München Kunstschütz, Restitution, Neubeginn,* München 2015, S.218-226.（以下、Iris Lauterbach, Der Central Collecting Point と略記）

8　Maik Kopleck 2015, S.10.（＝註5）Ulrike Grammbitter 2015, S.22-24.（＝註7）Iris Lauterbach, Der Central Collecting Point, S.218-226.（＝註7）

9　Maik Kopleck 2015, S.10.（＝註5）Ulrike Grammbitter 2015, S.22-24.（＝註7）Iris Lauterbach, Der Central Collecting Point, S.218-226.（＝註7）

10　Kraus Bäumler : Das NS-Dokumentationszentrum in München, der 》späte Münchner Weg《, in : Ulrike Grammbitter und Iris Lauterbach : *Das Parteizentrum der NSDAP in München* 2015, S. 90-92.（以下、Kraus Bäumler 2015と略記）

11　Maik Kopleck 2015, S. 5.（＝註5）Landeshauptstadt München 2006, S. 52.（＝註6）

12　Maik Kopleck 2015, S. 5.（＝註5）

13　Maik Kopleck 2015, S. 5.（＝註5）

14　Maik Kopleck 2015, S. 5.（＝註5）

15　Maik Kopleck 2015, S. 5.（＝註5）

16　Ulrike Grammbitter 2015, S.9-12.（＝註7）Landeshauptstadt München 2006, S.47.（＝註6）鉄鋼王で知られる実業家フリッツ・ティッセン（Fritz Thyssen: 1873-1951）が資金を出したとされる。Maik Kopleck 2015, S. 7.（＝註5）

17　Maik Kopleck 2015, S. 7.（＝註5）Winfried Nerdinger 1993, S.404.（＝註2）

18　Maik Kopleck 2015, S. 7.（＝註5）Kraus Bäumler 2015, S.90-92.（＝註10）

19 Maik Kopleck 2015, S.12.（＝註５）
20 Maik Kopleck 2015, S.14f. （＝註５）
21 Maik Kopleck 2015, S.68.（＝註５）Winfried Nerdinger 1993, S.71 und 89.（＝註２）
22 Maik Kopleck 2015, S.68.（＝註５）
23 Maik Kopleck 2015, S.68.（＝註５）
24 Maik Kopleck 2015, S.68.（＝註５）
25 Maik Kopleck 2015, S.8.（＝註５）Iris Lauterbach : Dampferstil am Königsplatz, Die Interieurs, in : Ulrike Grammbitter und Iris Lauterbach : *Das Parteizentrum der NSDAP in München*, Berlin 2015, S.44-57.（以下 Iris Lauterbach, Dampferstil と略記）　Winfried Nerdinger 1993, S.404.（＝註２）
26 Maik Kopleck 2015, S.8.（＝註５）Ulrike Grammbitter 2015, S.29.（＝註７）Iris Lauterbach: Austreibung der Dämonen, Das Parteizentrum der NSDAP nach 1945, in : Ulrike Grammbitter und Iris Lauterbach : *Das Parteizentrum der NSDAP in München,* Berlin 2015, S.73.（以下 Iris Lauterbach, Das Parteizentrum と略記）
27 安松『別府大学大学院紀要』2017、113 頁。（＝註１）
28 Maik Kopleck 2015, S.8.（＝註５）
29 Hrsg.v.Winfried Nerdinger : *München und der Nationalsozialismus, Katalog des NS-Dokumentationszentrums München,* München 2015, S.378f.
30 Maik Kopleck 2015, S.8.（＝註５）Winfried Nerdinger 1993, S.404.（＝註２）
31 Maik Kopleck 2015, S.8.（＝註５）Winfried Nerdinger 1993, S.404.（＝註２）
32 Maik Kopleck 2015, S.8.（＝註５）Iris Lauterbach, Dampferstil, S.58-65.（＝註 25）
33 Maik Kopleck 2015, S.8.（＝註５）Iris Lauterbach, Dampferstil S.58-65.（＝註 25）
34 Maik Kopleck 2015, S.26.（＝註５）
35 Maik Kopleck 2015, S.26.（＝註５）
36 Maik Kopleck 2015, S.26.（＝註５）
37 Maik Kopleck 2015, S.12.（＝註５）
38 Maik Kopleck 2015, S.35f. （＝註５） *Themen GeschichtsPad, Der Nationalsozialismus in München* 2006, S.37.Winfried Nerdinger 1993, S.350.（＝註２） Hrsg.v.Haus der Kunst München, a.a.O.,ohne Seite. （＝註４）
39 Maik Kopleck 2015, S.35f. （＝註５） *Themen GeschichtsPad, Der Nationalsozialismus in München* 2006, S.37.Winfried Nerdinger 1993, S.350.（＝註２）拙論「戦後ドイツの美術復興の一考察　ー占領下ミュンヒェンの『芸術の家』の展覧会を事例としてー」『別府大学大学院紀要』第 18 号、別府大学紀要委員会、2016 年、57-63 頁。（以下安松『別府大学大学院紀要』2016 と略記）
40 Maik Kopleck 2015, S.36.（＝註５）安松『別府大学大学院紀要』2016、57-63 頁。迷彩網で建物を被せていた写真の掲載として以下を参考。Hrsg.v.Haus der Kunst München,a.a.O.,ohne Seite. （＝註４）
41 Maik Kopleck 2015, S.36.（＝註５）
42 安松『別府大学大学院紀要』2016、57-63 頁。（＝註 39）
43 安松『別府大学大学院紀要』2016、57-63 頁。（＝註 39）
44 Maik Kopleck 2015, S.26.（＝註５）
45 Maik Kopleck 2015, S.36.（＝註５）

46　Maik Kopleck 2015, S.26.（＝註 5）
47　Maik Kopleck 2015, S.21.（＝註 5）
48　Maik Kopleck 2015, S.21.（＝註 5）
49　Maik Kopleck 2015, S.2f.（＝註 5）
50　Maik Kopleck 2015, S.17.（＝註 5） Winfried Nerdinger 1993, S.406.（＝註２）
51　Hrsg.v.Bayerisches Landesamt für Steuern : *Bayerisches Landesmat für Steuern und seine Dienstgebäude,* München 2011, S.17.
52　Gavriel D.Rodenfeld : *Munich and Memory, Architecture, Monuments, and the Legacy of the Third Reich,* London 2000, S.81.
53　筆者も説明板を確認しているが、2009 年の時点で説明板が立っていたことを示す写真が掲載されている。Iris Lauterbach, Das Parteizentrum, S.89.（＝註 26）そして 2017 年の夏にはその説明板はなくなっていることを筆者は確認している。
54　安松『別府大学大学院紀要』2017、107-116 頁。（＝註１）

図版典拠

図１　Iris Lauterbach : *Der Central Collecting Point in München Kunstschütz, Restitutio, Neubeginn,* München 2015
図３　*Themen GeschichtsPad, Der Nationalsozialismus in München* 2006
図６　Ulrike Grammbitter und Iris Lauterbach : *Das Parteizentrum der NSDAP in München,* 2015
図 15　Maik Kopleck : *München 1933-1945,* Berlin 2015.
図 2,4,5,7-14,16　筆者撮影